

芥川龍之介『枯野抄』を読む

——「国語Ⅰ」における「羅生門」読後の発展学習の試み——

井 上 博 夫

はじめに

生徒との最初の出会いを、みなさんの国語教室ではどのようにされているでしょうか。どのような挨拶を、話をされたでしょうか。私はこんな話からはじめました。

はじめてですから、まずは自己紹介からということになるのですが、なかなか一回の自己紹介で自分のことをうまく話すというのはむずかしいものです。これから一年間、だいたい百回くらい授業があります。そのうちに、ほくがどんな人間かはだんだんわかってもらえると思うのですが、まずどんな話から切り出したらいいだろうか、のですが、それでもやはり考えあぐんでしまいます。困ったときには、そう、自分がいいなと思った自己紹介にならっして試みるのがいいいんじゃないだろうかと思えました。そこでまず、ほくが一番印象に残っている、その自己紹介の話からしてみようと思います。

ほくが一番印象に残っている自己紹介というと、高校二年のときの物理の先生の自己紹介。ほくは理科系の科目はほとんど駄目で、物理なんていうのはいつも欠点ばかりとるような生徒だったんだけど、物理のその先生のことは、四十少し越えたくらいかな、太って貫祿のある、先生らしい先生だったけれど、好きでした。その先生の自己紹介の話。先生、黒板の前に立って、体全体を使って、ほんと黒板いっぱい名前を書かれた。「永井泰山（板書）。えーつ、今からはその先生になりかわって話をしようと思います。

「この名前、何と読むかわかりますか。」（何人か指名する。緊張もあつてか、答えは返ってこない。私の高校時代もそうでした。）

「たいざん」と読みます。どこにある山か知っていますか。（誰も知らない。これも私の高校時代と同じです。）

「中国は山東省にある山です。そういうええわかってもら

えると思うのですが、私は中国で生まれました。どんな山だと思えますか。日本でいえば富士山のような山です。私の両親が私に、あの泰山のように誰からも頼りにされる人間になってほしいと願ってつけてくれた名前です。」

この話に続けて、陰陽道のこと、そして重陽の節句のころなど中国の風俗・習慣について断片的な知識の切り売りのような話をし、こういいそえました。

永井先生が生まれ育ったころの日本というのは、ちょうど戦争に国民全体が向かっていた時代で、中国や朝鮮などはいくら隣国ではあつても遠い国。大陸でひと儲けしようと、その国を自分たちの思いのままにしようとしていた。そんな日本人が多くだなで、いわば敵国の国の人、心の支えにしている山の名前を、自分の子供につけた日本人がいたのか、と永井先生の話聞いて、まだ高校生だったぼくは、不思議な思いがしていました。そして、永井先生のご両親は、全然視点が違う。何を真ん中において人を見るのか。人と人の心のなかに国境はない。きつとそんな大きな目で人を見られていた。そんなことを考えていました……。

それから自分の名前について、自分の父親の少年時代の話などを交えながら話して、ちょうど一時間が終わりました。

た。私の授業では、その後もさまざまな雑談が飛び出し、した。「井の口少年野球団」「雪之下」「マグニチュード中規模の大地震」「さかえ母さん」「我を思苦さず学生に三態あり」などなど、授業の合間合間に話が続きました。授業のなかで聞かせたい、価値ある雑談をつくりだしたいと考え、続けていったよもやま話の数々についてまとめさせていただいた方が自分向きかとも思うのですが、今回はそんな雑談の合間合間にした、私の「国語Ⅰ」での授業の実践報告を、自分の授業のまとめとして、させていただけようと思えます。

*使用教科書

『羅生門』……右文書院『高等学校 国語Ⅰ 改訂版』
『枯野抄』……明治書院『現代文』他（投げ込み教材）

一 目的 「なぜ『羅生門』と『枯野抄』を重ね合わせて読むことにしたのか。」

私の『羅生門』の授業は、今回で三度目になります。まだわずかに三度目でしかないのですが、以前授業したその二度とも何となくもの足らなさを感じていました。授業では、必ずといっていいほど、その作品の「主題」は何かということに触れていくわけですが、『羅生門』の場合、たとえば「人間のエゴイズムの抽出」人間が生きていくためには、不正もまたやむを得ないとする人間のエゴをえぐ

り出そうとしている。」(明治書院『国語Ⅰ 発問事例集』六六ペ)とか、「1 平安末期、生活に追い込まれた下人の心理を描き、極限状況に置かれた人間のエゴイズムをあらわしている。」2 生きるためには悪を働く以外に道はない極限状況にある下人が、死人の髪を抜く老婆を見て、悪に對する正義感に燃え、やがて悪の行動へ決断する心理を追求しながら、人間の弱さと、エゴイズムの実態を描いている。」(右文書院『高等学校国語Ⅰ指導資料』四三ペ)のようなものを主題として話してしまうわけです。まだ若い下人が自分がこれから生きていく上で、善にも悪にも徹し切れないで迷っていたとき、そんな内的な矛盾を抱えている青年期に、老婆の悪を正当化する論理を聞き、自分の置かれている状況のなかで、自己のエゴイズムを肯定してしまふ。それが人間の、一面真実の姿なのだともとめることはできます。しかし、それが生徒たちにどれだけの共感をもって迎えられるか、まだこの作品を読んだきりでは不十分な気がしていたのです。確かに人間というのは身勝手なところがある。自分に都合が悪ければ、平気で嘘をついてしまふ。

芥川龍之介の『羅生門』においても作中人物それぞれに自己のエゴを出していきました。そのエゴイズムの問題をもっと深く追求できないか。より深く考えていくことはできないかと考えていたとき、『枯野抄』に行き当たりました。『枯野抄』と、できれば遺稿となつた『或る阿呆の一

生』とも重ね合わせて読むことができれば、主題を教え込むのではなく、生徒たち自身に主題そのものを感じ取らせることができるのではないだろうかと考えたのです。単発ではない、教材同士の結び付きの強さが深まりを生むと考へたのです。

ふだんでしたら、発展読書としていくつかの作品紹介にのみとどめ、あとは生徒の自主性に委ねるところですが、『枯野抄』を高校一年次で読み込むのはむずかしく、漢字・慣用句など語句の面からみてもかなりの抵抗がありそうなので、松尾芭蕉を中心とした文学史上の、歴史上の知識もかなり必要です。生徒がこの作品を読み、『羅生門』と同じようにテーマに迫っていくためには、こちらの方で生徒が読み込むまでに負担になりそうなこと(努力をさせないという意味ではなく、一時に一事の方針で、生徒の学習活動の内容をあまり欲張らないようにとの意です。)をある程度まではしていかなければいけないと思います。たとえば、序段で、松尾芭蕉が「旅に病んで」の句の推敲にかかわって門弟たちが、たとえば其角、支考がどのような考えをもっていたのかという知識は、作品を読むうえで欠かすことができません。が、その知識を高校一年生に期待するのは無理です。高校一年生が作品を理解するためには、作者芥川龍之介がこの作品を執筆する上で、緻密にしたとされる時代考証について、指導者の側で補っておく必要がどうしてもあるのです。授業で取り上げなければ、芥川龍

之介の作品に「羅生門」と同じように人間のエゴイズムをそのテーマとした「枯野抄」という作品があるという、知識が増えただけでたぶん終わってしまうと思うのです。

「枯野抄」は、二社の「現代文」の教科書（尚学図書・明治書院）に教材として取り上げてあるのですが、時期を選んで、たとえば三年次になって改めて芥川龍之介のを読むのと、今読むのどちらがより理解が深まるか、もし指導者の準備しだいで可能なら今だと考え、授業で取り上げることにしました。

授業の目標としては、次のことを考えました。

- ① 二作品を読み重ね、作中人物それぞれの人間像をとらえることによって、人間のエゴイズムについてより深く考える。
- ② 作中人物をとおして、作者芥川龍之介の人間観について考えてみる。
- ③ 作者芥川龍之介について理解を深める。

「羅生門」では、作中人物の心理を鮮明に浮き立たせるためにさまざまな伏線がはってありました。下人の募っていく孤独感を「きりぎりす」の動きによって表現したり、精神的に未熟であった下人の若さを「赤く膿をもった大きなきび」という肉体的な特徴によって強調してみせたりしています。「にきび」から手を離して老婆の検皮色した

着物を剃ぎ取る下人は、その精神的未熟さを同時に剃ぎ取ってしまいました。芥川龍之介は、主人公やその周辺にいる人々の変貌ぶりに、構成のうえでも巧みな整合性をもたせていましたが、それは「枯野抄」においても同様のことがいえます。「羅生門」を読むことによって開かれた生徒の目を試すために、「枯野抄」では何に注目させるとよいでしょうか。「枯野抄」において、例えば、芭蕉の心理を巧みに演出しているものとして何かなかったでしょうか、何かないでしょうか。

「枯野抄」では、「花屋日記」の引用にはじまり、すぐに元禄七年十月十二日の大坂町家の風景の描写に移っています。そのとき、芥川龍之介は妙に天候にこだわっています。史実に基づいたものなのかも知れませんが、このような解釈もできるのではと考えました。雨模様だった空も、芭蕉が終焉を迎える夕刻には陰曆十二日の上弦の月が姿をみせるくらいに回復しているはずですが、臨終間際の芭蕉の目にも門弟たちの目にもその姿が映ってよいはずなのに、芥川龍之介は、芭蕉の目には「一痕の月の光もなく」、ただ枯野の暮色だけが漂っていたのかもしれないとだけ記し、その後月のことについては触れていません。下人の「にきび」に意味を託したように、この月にも何かしらの意味を込めていないだろうか。仮に、光の消えた月を芭蕉死後の門人たちに、そして月を輝かせている太陽に芭蕉を置きかえてみたらどうなるでしょうか。実は、その設定に

そつて読み進めてみると、芥川龍之介が「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の一句をどのように解釈したのか、また夏目漱石死後の自分自身をどうみていたかがよく理解できるのです。このことは私自身の解釈でしかないのですが、他にも伏線として色の浅黒い支考やあばたずらの芭蕉などをあげることが出来ます。芥川龍之介は、「羅生門」と同様に「枯野抄」においてもさまざまな場面で伏線を張り、芭蕉の死に際しての門弟たち一人一人のエゴイズムを、次々とみごとに描き出していきます。「羅生門」の老婆のことが下人をかえてしまったように、門人たちをかえてしまったものがあるはずですが。芭蕉の生前は何とも思わずそのままやりすごせていたのに、芭蕉の死や門人たちの行動によって、もう一人の自分自身が存在することに気がつくようになる。「枯野抄」から、弟子たちの内心の姿に気づかせたものを、まずとらえてみる。そして、弟子たちの本来の姿をさぐりだしてみよう。そういう手順、それは「羅生門」での読み深めの方法と同じなのですが、その手順を踏めば、たとえば、芭蕉の生き様と自分の生き様とが決定的に違っていることに気づき自己の現実的・享樂的な生き方を選んだ其角、芭蕉から得た光（門人たちからの高い評価）に満足していた自己の内心への厳しい批評の存在を意識して異常な興奮に襲われ涙を流した去来、芭蕉に対しても誰に対しても心を開かず一定の距離を置いて接する生き方を貫いていた支考など、生徒たちは作中人物それぞれの人間像を

自分の力で読み込んでいくことができるはずですが。

二 授業の展開について

「羅生門」の授業は、生徒に質問しながら板書で内容をまとめていくという、ふだんどおりの授業展開でした。どのクラスも六時間の時間配当で終わっていますから、雑談の時間を考え合わせるとかなり早いペースで授業を進めていたともいえます。生徒は板書を写すのがたいへんだったようです。板書の時間を取るからといって、質問、説明に耳を傾けるよりまずカリカリカリと黒板を写している。板書は、内容の図式化を中心にしたものです。授業前の教材研究の際には、ここではこういう説明をして、ここでこれだけは生徒から聞き出すことなどと、細々と考えていたつもりなのですが、生徒からは、「現代文のノートは、試験の前に見直しても、何のこともよくわからない。」という声が返ってきました。「授業、聞いてとつたらわかるはずじゃ。」といなしてみたものの、図式化だけでは、語句の整理と内容のまとめにはなっても、生徒が理解を、自分の考えを深めるためのものにならないのは確かなことのようにでした。ノートの点検を試みても、授業で私がした発問を書き留めている生徒はいませんでしたから、どういふ流れのなかでこういうまとめがなされたのか、時間がたてばたつほどわからなくなってしまう。

三 「枯野抄」の指導過程

そこで、「枯野抄」の授業では、以前にも何度か自分なりの工夫として取り組んだことのある、サブノートによる授業展開を考えました。教材をじっくり読み込むための十分な時間が確保しにくい現実のなかで、投げ込み教材に時間をあまりかけることができないという制約と、さきほど私の板書の問題点としてあげた流れの不明確さを解消する目的とで、サブノートを用いた授業展開となったわけです。

このサブノートは、簡単にいえば、板書予定の事項のうち、文章に即して説明し、まとめていった方がわかりやすいと思われる箇所や発問に対する答えの箇所を空欄にし、書き込みができるようにしたものです。生徒が授業に積極的に取り組めるよう、作業プリントを工夫されて、利用されている先生方も多くいらつしやるのではと思うのですが、このサブノートでは、自分で何かを調べてくるというような生徒自身の活動はあまり取り入れられていません。あとになってそこに大きな問題があつたなと気がついたので、授業者である私の伝えたいことが確実に伝わるようにという思いが強すぎ、生徒から何かを引き出していくという点では不十分なものになりました。なお、サブノートを作るにあたっては、その一時間の授業で考えようとする内容を〈Q〉で示し、また図式化も取り入れて内容の整理ができるようにしました。

〈第一時〉

まず、序段にあげられている芭蕉辞世の句「旅に病んで夢は枯野をかけぐる」から、「夢」とこの作品の題にもなっている「枯野」の風景とを生徒に自由に想像させます。次に、支考「笈日記」に記されている推敲前の句「旅に病んでなほかけぐるゆめ心」と比較読みをします。実際の授業では、「芭蕉翁反古文」その他の文献についても取りあげ、三句で比較してみたのですが、芥川龍之介の人物設定をみたとき、ここで取りあげた二つの句で十分と思います。支考が比較した二つの句では、「夢」あるいは「ゆめ心」と記されている芭蕉の風雅を追い求める心に微妙に違いがあるようです。推敲前の句では、病臥にあり死を迎えるかも知れぬ自分ではあつても、自分の夢だけはそれでもやはりのちの世に引き継がれていくと強くいきつているのに対して、推敲後の句では自分の夢が「枯野」という寒々とした風景のなかを吹きすさぶ風のようにしか表現されていない点を押さえておきます。もちろん、推敲後の句は、「枯野」を俳諧を芸術として完成させることの困難さを示唆する言葉と読みとり、病臥という逆境にあつても風雅を追い求めようとしているのだという芭蕉自身の決意に満ちた生き様を表出したものと解釈することもできます。が、その一方で、自己の風雅を追い求める心が死後行き場を失っ

てしまったかのような読みもできる句になつてゐる点を見逃すことはできません。いずれの解釈にしても、『枯野抄』では、芭蕉自身ではなく、支考がこの句を芭蕉辞世の句としたのなら、それはなぜなのかを考えていくことが作品のテーマに迫る鍵になると考えました。この問題を全編を通して考えていく課題としていくことを生徒につかませておきます。

〈第二時〉

全文を通読します。第一段で、枯野の風景を演出する、芭蕉臨終の日の天候の推移を、時間の経過とともに押さえます。第三段に入り、月の光という、実際には見えるはずのものが見えない枯野の風景が暗示するものは何なのか、芭蕉の心象風景を考えさせるためです。第二段で、登場人物の概略を表現に即してまとめさせます。「羅生門」の下で雨やみを待っていた下人と同じように、自己の内心のエゴイズムに気がついていない、芭蕉高弟たちのそれらしい姿が描写されています。著名な門人たちについては、『日本古典文学大辞典』などを参照させて、史実に忠実な点など補足説明を加えておきます。

〈第三時〉

第三段、芭蕉の視線のなかに現実にして一痕の月の光もない枯野の風景が写っていたという表現に注目させ、弟子たちの姿が写っていない理由を考えさせます。身近にいる弟子の姿が見えないのはきわめて不自然な設定です。

その虚構が、実は芭蕉の弟子たちへの評価にもつながるものであることを押さえます。芭蕉を太陽に、弟子たちを月にみたと、「芭蕉が旅をしていく枯野に誰もいないのはなぜか。」「死ぬ間際の芭蕉の目に写つたものは何か」という問を授業の中心において、芭蕉が生前から門人たちをどうみていたかその人間模様を読みとっていくことにします。

〈第四時以降〉

段落を追って、個々の登場人物について考察していきます。人の死に際しての、当時の一般的な人々の態度・考え方を代表する人物として描かれている治郎兵衛の人間像をまず押さえ、芭蕉の高弟たちと比較していきます。次に、芭蕉の弟子たち一人ひとりについて、自己の内心のエゴイズムに気がついていく契機になつたものを押さえ、それぞれの変容をとらえていきます。木節は他の門人たちの視線から、其角は木節の表情、去来は其角の視線、丈草と乙州は正秀の慟哭から自己の内心の姿をみつめはじめました。支考は芭蕉の死そのものが支考自身を鋭くみつめさせるものになりました。もう一人の自分をみつめはじめた結果、たとえば、去来であれば、芭蕉の存在を抜きにして自己の高い評価がありえない、まさに太陽の光を受けて闇夜に輝く月であった自分自身に気がついていきます。その道筋をサブノートにそって図式化し、問によりまとめいきます。人格者として世評高い去来ですら、芥川龍之介の目を通して見たとき、芭蕉の跡を継ぐ者になりえなかつた点を押さ

え、冒頭の芭蕉の辞世の句に戻ります。支考では芥川龍之介との類似点に留意し、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」を師芭蕉辞世の句とした理由にもなっている「枯野のただ中も、花屋の裏座敷も、たいした相違があるわけではなく、芭蕉は限りない人生の枯野の中で野ざらしになつたと言つて差し支えない」という支考の心情、心理を読みとつていきます。同時に、支考の「本来薄情に出来上がった自分たち人間」という人間観を押しえておきます。夏目漱石死後の芥川龍之介の心情を代弁させたともとれる文章など、その他の門人たちについても一人ひとりの人間像をとらえていき、その都度辞世の句いに詠まれた「枯野」の風景の意味を読みふかめていきます。

〈最終時〉

門人たちのエゴイズムを一覧表により再度明らかにし、芭蕉の目に写っていた「枯野」の風景を芭蕉の孤高を訴えかけるものとして、また人間不信の芭蕉の心象風景として読み取らせません。まとめとして、『ある阿呆の一生』のうち、『羅生門』・『枯野抄』の創作に関連のあるもの、夏目漱石の死にかかわりのあるもの、そして芥川龍之介自身の死についてふれたものを抜粋して読ませます。選びだした章段は、「七 画／十 先生／十一 夜明け／十三 先生の死／二十二 或画家／四十九 剝製の白鳥／五十一 敗北」の七章です。漱石の推輓により文壇に登場した芥川龍之介が漱石の死に何を感じたのか、『枯野抄』に描かれ

た芭蕉、門人たちの姿とともに雄弁に語ってくれています。読後の感想文を課します。

(個々の門人ごとの授業の具体的な展開については、サブノートをご参照ください。)

四 反省と課題

教員になつたばかりのころ、教えていただいたことがあります。「教材を教えるのではなく、教材で教えるように」ということです。「枯野抄」を授業で取り上げたとき、はじめは教材を使って自分が生徒に伝えたいことを伝えようとしているつもりでいました。へ人間のエゴイズムについて、「教材で教えて」ているつもりだったのですが、はたしてどうだったのだろうか、と今は思っています。「枯野抄」は自分にとって魅力のある作品です。正秀の慟哭を哄笑と妄想を抱いた文章のように、自分の「いま」に引きつけて考えることができるようで、自分にはよくわかるような気がしたのです。実際、八人の門弟たちの人間像をサブノートのまとめのようにできたのも、自分に、あるいは自分の身近な人間にそういう面があったからです。授業で取り上げようしてみようとすると、生徒を中心に据えての、何かはつきりした教材選択の理由がなければそれは教材を教えていたことにはかならないのではないだろうか。

もう一つ、新任時に教えていただいたことを思い出しま

す、「授業の準備をしつかりするように。そのためには、授業のはじめに試験問題まで作っておくべきだ」。もちろん、授業での生徒の反応をみて、試験問題の変更をしなければならぬのは当然のことだという、留保条件付きのことばだったので、私の今回の授業は、そのことばどおり試験のことまで、ほぼ自分の案が固まってからしたもの。生徒の初発の感想から疑問点を拾い出して、それとともに考えるという手順を踏んではない、まさに教師主導のものでした。変更はありうろと思つていても、はじめたしもうとなかなか自分の枠からでることができないもので、生徒も自分の考えの枠の中に押し込められてしまったようなところがあります。

生徒の感想文を読むと、この教材が高校一年生にとつて本当にむずかしいものだったということがよくわかります。

①の生徒の感想文など典型的な例で、よく書けているとは思いますが、枠にはまった文章になつていような面もあるのです。表現の指導が不十分でそうなつたということもあるのですが、自分の考えがでてきていないということは、教材を教えることはまあまあ無難にいったかも知れないが、本人の力を引きだし伸ばしていかないということに他なりません。ある程度までつかんだら、ぼくの顔に泥をかぶせるような文句の一つ二ついつて、自分なりの何かをつかんでくれた方がいい。今回の授業、だいたい自分の予定どおりいつた、しかし、なのです。

以前勤務していた高等学校の「国語Ⅰ」の授業で田宮虎彦氏の『沖繩の手記から』を扱ったことがあります。授業後の生徒感想文に、「中学校でも習つた。また平和の教材か、と思つて、あまりおもしろくなかつた。しかし、今度はなんとなくよくわかつた気がした。」と書いたものがありました（しまったと思ひ、後で確かめてみると、確かに光村の中国語教科書との重複教材でした）。それに加えて自分の体験を交えながら戦争について語っていました。

『沖繩の手記から』の授業では、「単元名に『真実の記録』とあるけれど、それは当間キヨのように、自分は負傷者を見捨てることはできないという、ぼくから見れば人間として当り前のような生き方を貫こうとする人が死んでしまうのが戦争の真実ということなんだ。どんな状況下であつても、当間キヨのような純粹な人間がいるのだからそれを見ないさいというんじゃないんだ。」と話して、それを自分なりに受けとめ、考えを進めてくれていた。そして、自分が教えようとした以上のことを自分の力でつかみとろうとしていたことを、すごくうれしいと思つたわけです。

生徒にその教材で何を教えようとするのか、自分の一人よがりでないものをつくりだせるよう、生徒をそして自分の足もとを見えていかなければいけないと思つています。

